

ベクトルを幾何学に応用してみる。今回は図形をベクトルで表現してみる。
点の存在範囲について考えてみる。

ベクトルの分解

平面上のベクトル \vec{a}, \vec{b} がある。

$k\vec{a} + l\vec{b} = \vec{0}$ なる (k, l) は自明なもの $(0, 0)$ 以外はないとする。

このとき、平面上の任意のベクトル \vec{p} に対して、 $\vec{p} = s\vec{a} + t\vec{b}$ なる実数の組 (s, t) が一意に定まる。

3点が一直線上にある条件

3点 $D(\vec{d}), E(\vec{e}), P(\vec{p})$ が一直線上にある。

$\iff \overrightarrow{DP} = k\overrightarrow{DE}$ なる実数 k が存在する。

$\iff \vec{p} - \vec{d} = k(\vec{e} - \vec{d}) \iff \vec{p} = (1 - k)\vec{d} + k\vec{e}$

$\iff \vec{p} = s\vec{d} + t\vec{e}$ と表すとき $s + t = 1$

次の問題を考えてみる。

例題

三角形 OAB において、 $\overrightarrow{OP} = s\overrightarrow{OA} + t\overrightarrow{OB}$ とする。 s, t は次の条件を満たす。

$$s + t = 2, s \geq 0, t \geq 0$$

この条件を満たす点 P の存在範囲を見てみる。

3点が一直線上にある条件に当てはまるように変形する。(Hesse の標準形)

$$\overrightarrow{OP} = s\overrightarrow{OA} + t\overrightarrow{OB}, \quad s + t = 2$$

$$\iff \overrightarrow{OP} = \left(\frac{s}{2}\right)(2\overrightarrow{OA}) + \left(\frac{t}{2}\right)(2\overrightarrow{OB}), \quad \frac{s}{2} + \frac{t}{2} = 1$$

$s \geq 0, t \geq 0$ とあわせると、P は線分 CD 上にある。ここで、C は OA を 2:1 に外分する点、D は OB を 2:1 に外分する点である。

例題

三角形 OAB において、 $\overrightarrow{OP} = s\overrightarrow{OA} + t\overrightarrow{OB}$ とする。 s, t は次の条件を満たす。

$$s + 2t = 2, s \geq 0, t \geq 0$$

この条件を満たす点 P の存在範囲を見てみる。

$$\overrightarrow{OP} = s\overrightarrow{OA} + t\overrightarrow{OB}, \quad s + 2t = 2 \text{ から } s \text{ を消去して,}$$

$$\overrightarrow{OP} = (2 - 2t)\overrightarrow{OA} + t\overrightarrow{OB}$$

$t = 0$ とすると、 $\overrightarrow{OP} = 2\overrightarrow{OA}$ 、 $t = 1$ とすると、 $\overrightarrow{OP} = \overrightarrow{OB}$ 、P は線分 CB 上にあるのではないかと予想を立てる。ここで、C は OA を 2:1 に外分する点である。

実際、3点が一直線上にある条件に当てはまるように変形する。(Hesse の標準形)

$$\overrightarrow{OP} = s\overrightarrow{OA} + t\overrightarrow{OB}, \quad s + 2t = 2$$

$$\iff \overrightarrow{OP} = \left(\frac{s}{2}\right)(2\overrightarrow{OA}) + t\overrightarrow{OB}, \quad \frac{s}{2} + t = 1$$

$s \geq 0, t \geq 0$ とあわせると、P は線分 CB 上にあることがいえる。